

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

身体で覚えるものはたくさんあるが、知覚や感覚もそのひとつである。知覚や感覚はひよつとすると、私たちに生まれつき備わった能力だと思われているかもしれない。たとえば、オギヤーと泣いて生まれた瞬間から、眼をあげれば、人の顔や部屋の天井が見えるし、いろいろな足音や話し声が聞こえるように思われるかもしれない。それらがいったい何なのか、どんな意味をもつのかはわからないとしても、顔は顔に見えるし、足音は足音に聞こえる。知覚される世界、感覚される世界は、赤ん坊でも大人とたいして変わらない。こう思われるかもしれない。しかし、じっさいはそんなことはないのだ。

知覚や感覚もまた、私たちが世界から刺激を受け、それに応じて身体を動かすという経験を積んでいくなかで、次第に習得されるものである。そのような世界との交わりの経験がなければ、世界はただの混沌こんとんとして立ち現れるだけで、顔、天井、足音、話し声などに明確に区別されて立ち現れることはない。それぞれの事物が互いに明確に区別されることを「分節化」と言うが、身体による世界との交わりがなければ、世界は分節化されて立ち現れてこないのである。

② モリヌークス問題という興味深い問題がある。これは、生まれつき眼の見えない人が開眼手術を受けて眼が見えるようになったとき、その人は立方体と球を眼で見ただけで、どちらがどちらであるかを正しく言い当てることができるだろうか、というものである。この人はもちろん、触覚によって「立方体」と「球」という言葉を習得したので、手で触れば、どちらが立方体で、どちらが球かを正しく述べることができる。しかし、手で触れずに、眼で見るだけで、どちらがどちらなのかを正しく言い当てることができるだろうか。

パツと聞くと変な問いに感じられるかもしれないが、この問題は人の知覚の成り立ちを考えるうえで、とても重要な視点を与えてくれる。なぜなら、この問題の背後には、ひとつの重大な前提があるからだ。それは、開眼手術を受けた人がはじめて眼を開いて立方体と球を見たとき、立方体はすでに立方体に見え、球はすでに球に見えるという前提である。

この前提のもとでは、モリヌークス問題への答えは「ノー」であるように思われる。なぜなら、立方体が立方体に見え、球が球

に見えても、その立方体と球の視覚的な現れ(見え姿)はそれらの触覚的な現れ(手触り)とは明らかに異なるので、どちらが立方体で、どちらが球かを、触覚によって正しく述べることはできても、視覚によって正しく述べることはできないように思われるからである。

しかし、じっさいは、<sup>③</sup>その前提が成り立たない。開眼手術を受けた人が眼を開いても、すぐには何も見えないのである。眼のまえに広がるのはまったくの混沌である。ふつうの人でも強烈な光を浴びると、まぶしくて、ほとんど何も見えなくなる。それと似て、開眼手術を受けた人の場合も、最初は光のウズが眼前に広がるだけである。そこから時がたつと、やがて立方体が立方体に見え、球が球に見えるようになる。しかし、そのためには、立方体や球から光の刺激を受け、それに応じて身体(頭や眼球など)を動かすという経験を積まなければならない。そのような経験のなかには、身体の動きを触覚的に感受することも含まれている。つまり、立方体と球の視覚経験のなかには、触覚経験が入りこんでいるのである。

そのため、立方体が見え、球が球に見えるようになったときには、立方体と球の視覚的な現れから、どちらが立方体で、どちらが球かを言い当てることができるかもしれない。なぜなら、それらの視覚経験に入りこんだ触覚経験が、立方体と球の触覚的な現れと何らかのつながりがあるかもしれないからである。このようにつながりがあれば、立方体と球の視覚的な現れをそれらの触覚的な現れと関係づけることができるかもしれない。そうすると、視覚的な現れから、どちらが立方体で、どちらが球かを言い当てるようになるだろう。

<sup>④</sup>モリヌークス問題は、すぐ決着がつきそうにみえて、なかなか決着がつかない。それは、開眼手術を受けても、すぐには事物が見えないからである。事物が見えるようになるには、刺激に応じて身体を動かすという経験(触覚経験を含む経験)の積み重ねが必要である。ここでは、モリヌークス問題への答えがどうなるかにはこだわらないで、この点を指摘するにとどめたい。

この点はまた、<sup>⑤</sup>上下逆さまメガネを掛け続けたときに起こる感覚の変容からもよく示される。上下逆さまメガネを掛けると、すべてのものが文字どおり上下逆さまに見える。天井は下に見え、床は上に見える。このように視覚が大きく変化するので、すぐにはそれまでのように自由に動くことができない。それでもそのメガネをかけたまま、ともかく身体をいろいろ動かすという経験を

積んでいくと、一週間ほどで、もとのように自由に動けるようになる。そしてそのときには、何と上下逆さまではなく、すべてが正立して見えるようになる。自由に動けることと正立して見えることは同時に成立するのである。

こうした視覚の変化が生じる途中の過程で、じつに興味深い現象が起こる。逆さから正立への変化は一瞬で切り替わるわけではない。そのあいだに、あるものは逆さに、あるものは正立して見えたり、さらに物事がもつと解体して混沌に近いジヨウタイに見えたりする段階がある。そのような恐ろしい無秩序の段階を経て、ようやくすべてが正立して見える秩序だった段階が訪れるのである。しかし、そうなくても、安心するのはまだ早い。逆さメガネを外すと、またすべてが逆さに見える。メガネを着けないもとの生活に戻るには、もう一度、あの恐ろしい無秩序の段階をくぐりぬけなくてはならないのだ。

エナクティヴィズムという考え方がある。それは、事物が事物として知覚できるようになるためには、身体を動かして事物からうまく刺激を探り出すことが必要だという考え方である。机が机に見え、雨音が雨音に聞こえるという **⑥** された知覚が成立するためには、それらの事物から受ける刺激に応じて身体ごとくに眼や耳などの感覚器官を適切に動かして、それらの事物から新たな刺激を探り出し、その新たな刺激に応じてまた身体を適切に動かすということを繰り返していく必要がある。

このような「刺激の探り出し」を適切に行う能力は「感覚・運動スキル」とよばれる。私たちは事物との交わりを通じてこの感覚・運動スキルを習得する。そしてこのスキルを用いて事物から刺激を適切に探り出すことによって、 **⑥** された知覚を得るのである。何が描かれているのかがよくわからない図をしばらくあれこれ眺めていると、パツとあるもの（たとえば、髭ひげをはやした男）が見えてくることがある。そしていったんそれが見えるようになると、つぎはすぐそれを見ることができ。しばらく眺めているあいだに、それを見るための感覚・運動スキルを習得したのである。

ソムリエや指揮者は常人にはソウゾウもできないようなセンサイな味覚や音感をもっている。ソムリエはワインの味を、そのワインの産地や何年ものかなど、驚くべき詳細さと正確さで識別できる。交響曲の指揮者も、ボウダイな数の音の響き合いのなかから、それぞれの音を正確に聞き分けることができる。この人たちのほかに、たとえば、天文学者は夜空に超新星を見ることができるし、医師はレントゲン写真に病巣を見ることができ。 **⑦** このような驚嘆すべき知覚能力も、長年の経験によって培わ

れた感覚ー運動スキルによって可能になるのである。

のぶはらゆきひろ  
〔信原幸弘〕「覚える」と「わかる」 知の仕組みとその可能性』による

問一 二重傍線部 a く e のカタカナを漢字で書け。

問二 傍線部①に「そんなことはない」とある。筆者はどのようなことを否定しているのか。簡潔に説明せよ。

問三 傍線部②「モリヌークス問題」とはどのような問題か。条件を明確にして説明せよ。

問四 傍線部③に「その前提が成り立たない」とある。

- 1 「その前提」とはどのような前提か。その前提が書かれている一文の最初と最後の五字を答えよ(句読点を含む)。
- 2 「その前提が成り立たない」とはどういうことか。理由とともに、説明せよ。

問五 傍線部④に「モリヌークス問題は、すぐ決着がつきそうにみえて、なかなか決着がつかない」とある。モリヌークス問題に対して「イエス」と答える可能性があるのはなぜか。説明せよ。

問六 傍線部⑤に「上下逆さまメガネを掛け続けたときに起こる感覚の変容」とある。どのような「変容」が起こるのか。変容の順序に沿って説明せよ。

問七 ⑥ に当てはまる最も適切な語を、本文の前半部分から五字以内で抜き出して答えよ。

問八 傍線部⑦に「このような驚嘆すべき知覚能力も、長年の経験によって培われた感覚・運動スキルによって可能になるのである」とある。「驚嘆すべき知覚能力」は、どのようにして得られるのか。交響曲の指揮者の例に沿って、「刺激」という語を用いて説明せよ。

第二問 次の文章は、『義経記』の一節である。源義経主従は、源頼朝との対決を避け、静を伴い都を離れて吉野に隠れる。頼朝は、その義経一行を今も追っている。これを読んで、後の問いに答えよ。

判官、武蔵坊を召して仰せられけるは、「人々の心中を義経知らぬ事はなけれども、僅かの契りを棄てかねて、これまで女を具しつるこそ、身ながらも実<sup>ア</sup>に心得ぬ。これより静を都へ歸さばやと思ふはいかがあるべき」。武蔵坊畏<sup>カシ</sup>まり申しけるは、「これこそゆゆしき御計らひ候ふよ。弁慶もかくこそ申したく候ひつれども、畏れをなし参らせてこそ候ひつるに、か様に申し召し立ち候はば、日の暮れ候はぬ先に、疾く疾く御急ぎ候へ」と申せば、「何しに歸さん」と言ひて、また「思ひは歸さじ」と言はんことも、侍共の心中いかにぞやと思はれければ、力及ばず。静を都へ歸されけり。

「誰か志あらん者、静を京へ届けてばや」と仰せられけり。侍二人、雑色三人御供申すべき由を申しければ、「偏へに義経に命をくれたるところ思はんずれ。道の程よくよく<sup>イ</sup>勞りて都へ届けて、各々はそれよりして何方へも心に任すべし」と仰せを蒙りて、静を召して仰せられけるは、「志尽きて都へ歸すにはあらず。これまで引き具したるも志愚かならぬ故にてこそ。心苦しかるべき旅の空にも人目をも顧みず具足しつれども、よくよく聞けばこの山と申すは、役行者の踏み初め給ひし菩提の峰なれば、精進潔斎せでは、叶ふまじき峰なるを、わが身の業に犯されて、これまで具し奉る事、神慮の恐れあり。これより都へ歸りて、禪師のもとに忍びて、明年の春を待ち給へ。義経も明年も実に叶ふまじくば出家をせんずれば、人も志あらば、共に様をも変へ、経をも読み、念仏をも申さば、今生後生などか一所にあらざらん」と仰せられければ、静聞きもあへず、衣の袖を顔に当てて泣くより外の事ぞなき。

「御志尽きせざりし程は、四国の波の上までも具足せられ奉りぬ。

あ 尽きぬれば力及ばぬことなれども、憂き身の程

こそ思ひ知られて悲しけれ。申すにつけてもいかにぞやと覚え候へども、過ぎにし夏の頃よりしてただならぬ事とかや申すは、座すべきものにも早定まりぬ。世に隠れもなき事にて候へば、六波羅へも鎌倉へも聞こえんずらん。東の人は情けなしと聞けば、今に取り下されて、いかなる憂き目を見せられんずらん。ただ思し召し切りて、これにていかにもなし給へ。御為にもみ

づからが為にも、なかなか生きて思はんよりも」と、搔き口説き申しければ、「ただまげて都へ帰り給へ」と仰せられけれども、御膝の上に顔をあて、声を立ててぞ泣き伏しける。侍共もこれを見て、皆袂をぞ濡らしける。

判官髪びんの鏡を取り出だして、「これこそ朝夕顔を写しつれ。見ん度に義経見ると思ひて見給へ」とて、賜たまひにけり。これを賜りて、今亡き人の様に胸に当ててぞ焦がれる。涙なみだの隙ひまよりかくぞ詠じける。

A 見るとても嬉うれしくもなします鏡恋しき人の影を留めねば  
と詠みたれば、判官枕を取り出だして、「身を離さでこれを見給へ」とて、かくなん。

急げども行きもやられず草枕静なに馴なれしころならひに  
それのみならず、財宝をその数取り出だして賜たまひにけり。

〔義経記〕による

注 役行者……修験道の開祖。

菩提……煩惱を断つた悟りの境地。

禅師……静いその母である磯いその禅師。

六波羅……鎌倉幕府が京都に置いた出先機関。

取り下されて……つかまつて、都から鎌倉へ送られて。

問一 二重傍線部①く③の「れ」について、それぞれ文法的に説明せよ。

例 存続の助動詞「たり」の已然形活用語尾

問二 傍線部ア「身ながらも実に心得ね」、イ「何しに帰さん」、ウ「思ひは帰さじ」、エ「何方へも心に任すべし」、オ「人も志あらば」を現代語訳せよ。

問三 波線部 a の「かく」は、何を指すか。十字以内で答えよ(句読点を含む)。

問四 波線部 b に「志尽きて都へ帰すにはあらず」とある。ここでは、どのような理由で都へ帰すと静に説明しているか。二十五字以内で答えよ(句読点を含む)。

問五 空欄 あ には、文章中の一語が入る。最も適切な語を、この段落より前の文章中の二字で答えよ。

問六 波線部 c に「ただ思し召し切りて、これにていかにもなし給へ」とある。ここで、静は、どうしてほしいと言っているのか。前後の文章をふまえて、簡潔に答えよ。

問七 波線部 d に「これを賜りて、今亡き人の様に胸に当ててぞ焦がれける」とある。静がこのようにしたのはなぜか。三十字以内で答えよ(句読点を含む)。

問八 「恋しき人」が誰を指しているかを明らかにしつつ、Aの歌を現代語訳せよ。



第三問

次の文章は、呉兢こきやうが編纂した『貞觀政要』政体の一章である。これを読んで、後の問いに答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）

上謂ヒテ侍臣ニ曰ハク、「朕看ルニ古之帝王ヲ、有レ盛有レ衰、猶ニ朝之有レ暮。皆為ニ下

蔽おほヒ其ノ 、不知ラ時政得失、忠正者不言、邪諂じゃてん者日進、既不ルガ

見過失、所以至ルニ於滅亡。朕既在リ九重、不能ハ尽見ルコト天下事。故布キ之

卿等、以為ス朕之耳目。莫カレテ以ニ天下無事、四海安寧、便不ルコト存意。『書』

云、「可キハ愛非君、可キハ畏非人。』天子者、有レ道則人推而為ス主。無ケレバ道

則人棄而不用。誠可畏也。」

魏徵べい对曰、「自古失国之主、皆為ニ居安忘危、処理忘乱、所

以不能ハ長久。今陛下富有ニ天下、内外清晏、能留メ心治道、常如ニ

臨深履薄、国家曆数、自然靈長。臣又聞古語云、「君舟也。人

水也。水能載舟、亦能覆舟。』陛下以為レ可畏。誠如ニ聖旨。」

注 吳兢……唐の歴史家。六七〇〜七四九。『貞観政要』……唐の太宗と臣下との政治上の議論をまとめた書。

上……天子。ここは太宗のこと。唐の第二代皇帝、李世民。五九八〜六四九。 朕……天子の自称。

邪詔……心がねじけて、おべっかをつかう。 九重……奥深い宮中。 布……分担させる。

卿……君主が臣下を呼ぶ称。 存意……気にかける。 書……『書経』。 魏徵……太宗の臣下。五八〇〜六四三。

清晏……太平で治まっている。 臨深履薄……深い淵に臨み薄い氷を踏むように用心深いこと。

曆数……王朝の命運。 靈長……威光があつて長久であること。 古語……先人の言葉。

聖旨……天子の考え。

問一 二重傍線部 a「故」b「対」c「自」は、それぞれ本文中ではどのように読むか。その読み方を送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。(現代仮名づかいでもよい。)

問二 空欄  に入る語として最も適切なものを、次のア〜オの中から選んで記号で答えよ。

ア 過失      イ 天下      ウ 耳目      エ 安寧      オ 曆数

問三 傍線部①「猶朝之有暮」を書き下せ。(現代仮名づかいでもよい。)

問四 傍線部②「不能尽見天下事」を平易な日本語に訳せ。

問五 傍線部③「有道」とあるが、具体的に天子のどのような態度のことをいうか。本文中からその内容として最も適当な四字を抜き出せ。

問六 傍線部④「誠可畏也」とあるが、誰が誰をなぜ恐れなければいけないのか、説明せよ。

問七 傍線部⑤「覆舟」とあるが、具体的にどのような状況のことをいうか。本文中からその内容として最も適当な四字を抜き出せ。

問八 太宗のいう、国が「滅亡」する原因に対し、魏徴は国が「長久」しない原因をどのように考えているか。両者の違いが分かるように説明せよ。